

イエスと共なる旅を！

丸山 勉

[聖書] マルコによる福音書4章35節～41節

その日の夕方になって、イエスは、「向こう岸に渡ろう」と弟子たちに言われた。そこで、弟子たちは群衆を後に残し、イエスを舟に乗せたまま漕ぎ出した。ほかの舟も一緒であった。激しい突風が起こり、舟は波をかぶって、水浸しになるほどであった。しかし、イエスは艫の方で枕をして眠っておられた。弟子たちはイエスを起こして、「先生、わたしたちがおぼれてもかまわないのですか」と言った。イエスは起き上がって、風を叱り、湖に、「黙れ。静まれ」と言われた。すると、風はやみ、すっかり凪になった。イエスは言われた。「なぜ怖がるのか。まだ信じないのか。」弟子たちは非常に恐れて、「いったい、この方はどなたなのだろう。風や湖さえも従うではないか」と互いに言った。

[序]「旅」の喜び

今日のこの奇蹟物語はある意味分かりやすい話だと思います。ガリラヤ湖の上で起こった突然の嵐。舟に乗っていた弟子たちはパニック状態になりました。けれどもイエス様は寝ていらっしゃる。弟子たちの助けを求める声にイエス様は起き上がりました。そして、風を叱って「黙れ、静まれ」と湖に言うと、その嵐は鎮まったというストーリーです。そんなバカなことがあるものか、と思ったり、或いは「フ～ン」と聞いてしまえば、自分とは無関係の話で終わってしまいますが、ここには、やはり神様からの大きな福音が語られているように思いました。

先ほどご一緒に歌った新生讃美歌 507 番の 2 節の歌詞はこうなっていました。

「涙の谷間も、花咲く園にも 嵐の海にも 主は共にいます

主の手に委ねて 日々導かれつ 御旨のままにぞ われ従い行く」

今日これから私がお話したいことも、これに尽きると言っても良いと思います。

信仰生活というのは、よく「旅」に例えられますけれども、「旅」の一番大きな喜びは何でしょうか？どこに行くのか、それも勿論大きな楽しみです。景色、食事、お土産、どれも旅の楽しみだと思います。けれども、どうでしょう。「誰と一緒に行くのか」、それに勝る喜びはないのではないのでしょうか。私たちの人生の旅は、イエス様と一緒に歩む旅です。私はそれが本当に嬉しいですね。

[1]安全神話

「安全神話」という言葉がありますね。今度新しく改訂された国語辞典の『広辞苑』にも新しく採用されたということですが、「安全神話」の意味についてこう書いているようです。

「安全に関する神話。根拠もなく絶対に安全だと信じられていること」(例文は「原発の

安全神話が崩れる」)。

私はクリスチャンにもこの「安全神話」に近いものがひょっとするとあるのではないかと思います。「イエス様は絶対に私を苦しい目に遭わせない。私がまだこの世で使命を与えられている間は死ぬことはない」などと考えることです。楽観的と言えば楽観的ですが、実はそんなことはないのではないのでしょうか？

もしそうであれば災害で亡くなられたような方や、急な病になられた方は、神様は見離されたということになってしまいます。それでは自己中心の、他者を傷つけかねない信仰です。それは、聖書が教える信仰ではないと私は思います。

私たちの人生は、好むと好まざるとにかかわらず、それこそ海の上で小さな舟を漕ぐ時、思わぬ嵐に見舞われるというような経験を何度かするのではないかと思います。決して「非日常」なことではないと思うのです。私たちは陸地に住んでいますから、海の上を進むなんていうことは特殊なことと思ってしまうのですが、実は、この地球の7割は海であって、地球は別名「水の惑星」と言われているのですね。

私たちが陸地で生きているということ自体、大変な奇跡と考えても差し支えないことなのです。最近のことを振り返ってみても、大地震、津波、大寒波、火山の噴火、大雪、或いは流行性の病気など…。私たちの日常は、一皮むけばいつだって危機や死と隣り合わせです。今日の聖書の、海を行く小舟と嵐の記事はそのことも気付かせてくれるのではないのでしょうか。

[2]この舟にはイエス・キリストが同船している

今日の箇所、何故だろう？と理解が及ばないところがあると思います。

イエス様は最終的に、弟子たちが死ぬ思いも抱いた大変な海の上の嵐を鎮めて下さった訳ですが、でも、最初に「向こう岸へ渡ろう」と言いだされたのもイエス様ですよ。イエス様、一体どういうことですか？と聞きたくなります。

けれども、よく見てみますと、イエス様は弟子たちを見離されたのでしょうか？そうではありませんでした。この小さな舟にイエス様は「同船」していらっしゃるのですよね。「運命共同体」と言う言葉がありますけれども、むしろイエス様は、本当に弟子たちと運命を同じくされていらっしゃるのです。

これは実は大変なことではないのでしょうか？これは、よくよく考えたいことです。と言いますのは、私たちは、このような神様というのは、初めは考えたこともないはずで

私たちの神様のイメージは、あの芥川龍之介の「蜘蛛の糸」の小説のように、上から糸を垂らすようにして救いの手を伸ばす神様のイメージを持つのではないのでしょうか。(あの小説ではお釈迦様ですけども)つまり、「天上」にいるお方です。

しかし、この時、イエス様は天上にはおられません。嵐の海、突風で波をかぶる絶体絶命の弟子たちの運命と一緒に背負っておられるのです。

主がクリスマスの夜、家畜小屋の飼い葉桶で産声を上げた、ということはそういうことではないでしょうか？人間のありとあらゆる経験を、ご自分も経験なさるために、神様はイエス・キリストを真の人間としてお遣わしになられたのですね。決して「蜘蛛の糸」のように、上から眺めてはいるお方ではありません。

[3] 艫の方で眠っておられるイエス・キリスト

この救い主イエス様は、嵐の海のただ中に、一緒になって翻弄されています。けれどもこのような中で、主はこともあろうに「眠っておられる」のです。

イエス様は、なぜ「眠って」おられたのでしょうか。疲れていらしたから？そうかもしれませんが、物凄い揺れの中でこんなに眠れるのでしょうか？或いは、神様が与える確かな平安の中にいたので、このような中でも安らかであった、という捉え方もなるほどそうかと思えます。しかし、全く違うことを言う聖書学者もいます。

それは「眠る」というのは、聖書においては、しばしば肉体の「死」を意味している、ということです。「枕をして」というのも、まさか枕を用意していたわけではなく、完全に横になっていたという意味もあるとのこと。それは言い換えれば、まるで墓の中にあるように身を横たえていた、ということです。

弟子たちも、なぜイエス様はこんな時に眠っておられるのかと不思議に思ったことでしょうが、それ以上に、もしイエス様が不在同然であればこれは大変なことだと、とてつもない不安に襲われたのではないかと思います。

今、弟子たちは、イエス様よりも、目の前に襲っている「死」の現実の方が、リアリティを持って迫ってきてしまっていました。

でも、ここで彼らは叫ぶことが出来たのです！これは幸いなことです。

38 節「弟子たちはイエスを起こして、「先生、わたしたちがおぼれてもかまわないのですか」と言った。」とあります。（「おぼれても」は「滅びても」と同じ意味の言葉です）。わたしは、これは、イエス様がこれまで本当に近くにいらしたから言えた言葉ではないかと思います。もし恐ろしいお方でしたら、こんなに弱音を吐いてぶつかっていくことは出来ません。

しかも、注目したいことは、イエス様は< 艫の方で > 枕をして眠っておられた、とあります。「艫の方」とは、船尾です。一番揺れが激しい所であり、もし舟が沈むようなことがある時は、多くの場合、この船尾から沈んでいくそうです。イエス様は、そこをご自分の場所とされたのです。先ほど「運命共同体」と言いましたけれども、何よりもまずイエス様が体を張っていらっしゃるのです。そこに私たちはあの、私たち罪人に代わって命を投げ出された十字架の贖いの業を見せられるのです。

[4]「死」からよみがえった方を信頼する

この 38 節の、「先生、わたしたちが溺れても＝滅びてもかまわないのですか？」

—この弟子たちの叫びは、私たちの叫びです。

「もうこれで私たち、おしまいですか？ イエス様、あなたは神の国のこと、また幸いな人生のことを色々と語って下さいましたけれども、私たちは滅びてしまうのですか？ 結局、＜死＞よりも強いものはないのですか？」—

そう叫ぶ弟子たちに対して、イエス様は横たわったままではありませんでした！

「イエスは起き上がって、風を叱り、湖に、「黙れ。静まれ」と言われた。すると、風はやみ、すっかり凪になった。」(39 節)

この「起き上がり」というのは、イエス様が「復活する」と同じ意味の言葉が使われています。ですから、ただこの自然界をもイエス様は支配するお力をもっているのだ、という以上のことがここで語られているのです。すなわち、闇の海、嵐の海のただ中でもそれに負かされることはない。全てを無に帰そうとする「死」の力を打ち破って、イエス様はよみがえられ、弟子たちや私たちを「向こう岸」へと連れて行って下さる、ということです。

「太陽の賛歌」を書いたアシジのフランチェスコは、その歌の中で「私たちの姉妹である死よ」と歌いました。凄いですね。彼にとって、死は、恐れる対象ではなく、神の国に入るための入り口に過ぎない、と言うことなのでしょう。「私たちの姉妹である死よ」。—私は、なんと自由な生き方だろうと！と思いました。

[結]主の手に委ねて

イエス様も仰いました。

「なぜ怖がるのか。まだ信じないのか。」(40 節)

これは、弟子たちを責める言葉ではないと思うのです。「私がいるではないか。何を恐れる必要があるのか？ 「死」を絶対化しなくてもよいのだよ。私は復活の主として、いつもあなたと共にいるのだから。私を信頼しなさい。私が「向こう岸へ渡ろう」と言ったのだから、必ずあなたを最後まで面倒見る。だから、今のあなたの地上の生を精一杯生きなさい」と。これは本当に、私たちを愛しているが故の、信仰への招きの言葉ではないでしょうか？

先ほどの讚美歌 507 番 4 節ではこう歌いました。

「世の業 終わりにて み許に行く時 死の波恐れじ 主共にいませば
主の手に委ねて 日々導かれつ 御旨のままにぞ われ従い行く」。
アーメン。

「見よ、私は世のおわりまであなたがたと共にいる」(マタイ 28:20)。

お祈り致します。

主イエス・キリストの父なる神様、聖なる御名を讃えます。
御言葉の恵みを感謝致します。

私たちの人生の旅、時々大変不安に襲われる時があります。あなたに愛されていると教えられながらも、結局は私は一人で生き、一人で死んで行くのだと、言葉にならない虚しさに襲われることがあります。私たちの、いえ、私の不信仰をおゆるし下さい。そんな者に向かって、あなたは、繰り返し繰り返し、「なぜ怖がるのか。まだ信じないのか。」とあなたご自身につながるように招いて下さいます。手を差し伸べて下さいます。どうかその手を振り切ることなく、あなたとつながる幸いに生きることが出来ますように。自分の不信仰に勝つことが出来ますように、聖霊によって助けて下さい。

「死」の力に対して、「黙れ、静まれ」と叱られた復活の主よ、私たちがどんなに弱く罪深くとも、十字架と復活のあなたが「私」という舟、また「川越教会」という舟に同船して下さいますから、安心して、恐れを捨てて、あなたの導きの中を進ませて下さい。

御言葉が、その行く手をいつも照らして下さい。

救い主イエス・キリストの御名によってお祈り致します。 アーメン。